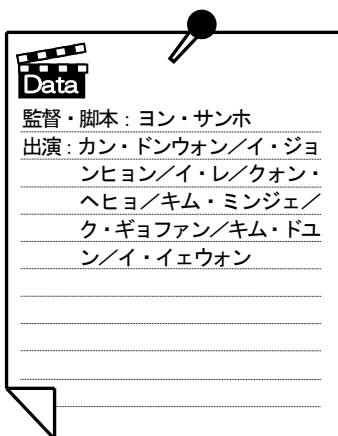




👁️👁️ みどころ

瀬々敬久監督の『感染列島』(08年)は、「新型インフルエンザ」らしき感染症で汚染された、今から10年前の日本列島だったが、本作はゾンビ化してしまった朝鮮半島の4年後を描くもの。香港に亡命していたジョンソクたちは、2000万ドルを積んだトラックを取り戻すべく、再び半島に乗り込んだが・・・。

半島は今や死の街に！そう思っていたが、現実には631部隊の他、美女たちの家族も生存。なるほど、なるほど……。631部隊の凶気が、ゾンビ以上であることは、『グラディエーター』(00年)と同じような“お楽しみ”を観ればよくわかる。ひょっとして、これが人間の本性・・・？

おっと、それはサブストーリーで、本作のクライマックスは、カネと脱出の両者を賭けた三者入り乱れたカーチェイスになる。もちろん、結果はミエミエのはずだが、そこに至るまでのプロセスと韓国映画特有の“濃さ”をタツプリと味わいかつ楽しみたい。

■□■コロナが拡大する中、ゾンビ映画も拡大！■□■

300万円という低予算でも、素人に近い俳優陣でも、「アイデアさえ良ければ!」、「脚本さえ良ければ!」を日本中に実証し、劇場を超満員にしたのが、上田慎一郎監督の『カメラ止め!』こと『カメラを止めるな!』(17年)だった(『シネマ42』17頁)。日本の「ゾンビ現象」はそんな小作品から生まれたが、韓国で「ゾンビ現象」が起きたのは、『新感染ファイナル・エクスプレス』(16年)から。ソウル発、プサン行き的高速鉄道 KTX 内で突然、感染爆発が起き、乗客が次々と凶暴化(ゾンビ化)していったから大変だ。

その4年後を描いた本作冒頭では、姉夫婦とまだ幼い甥を連れたジョンソク大尉(カン・

ドンウォン) が、やっとの思いで日本行きの船に乗り込む姿が映し出される。ところが、何とその客室内で感染が発生したため、姉と甥はジョンソクの目の前で凶悪なゾンビたちに襲われてしまうことに……。日本での受け入れを拒否された船は何とか香港にたどり着いたが、それから4年、ジョンソクは義兄のチョルミン (キム・ドユン) と共に、香港の片隅で絶望的な日々を送っていた。

「ゾンビ映画」の起源は『フランケンシュタイン』(31年)等の“モンスター映画”にあり、その後、世界的にヒットした『ゾンビ』(78年)等で広く知られるようになった。そして、ミラ・ジョヴォヴィッチ主演の『パイオハザード』シリーズ(01年、04年、07年)(『シネマ2』235頁、『シネマ6』300頁、『シネマ16』423頁)の出現や、ダニー・ボイル監督の『28日後... (28 DAYS LATER)』(02年)(『シネマ3』236頁)や『28週後...』(07年)(『シネマ18』364頁)のヒットによって、新たに21世紀の「ゾンビ映画」が確立され、『ゾンビランド』(09年)、『ワールド・ウォーZ』(13年)(『シネマ31』164頁)等が次々と作られた。これらのゾンビ映画の系譜については、パンフレットにある伊東美和(ゾンビ映画サポーター)の「ゾンビ映画の系譜とヨン・サンホの描くゾンビ」を熟読したい。

2020年には新型コロナウイルスがパンデミック化したが、それに伴って「ゾンビ映画」も拡大の一途を辿るのは必至!? そんな中、前作の『新感染 ファイナル・エクスプレス』を大ヒットさせた韓国のヨン・サンホ監督は、その続編たる本作をどんな「ゾンビ映画」に?

■□■ジョンソクの仕事は?再び半島へ潜入?そんなバカな!■□■

2020年は、2月以降の新型コロナウイルス騒動の発生とパンデミック化によって全世界が大変な状況に陥った。そんな中、日本で顕著になっているのが、感染者への差別だが、それは本作でも同じ、いや、それ以上だ。食堂に入っても、韓国からの亡命者であることがバレると、「半島者は出ていけ」と客から罵倒されていたから大変。そんな2人がまともな仕事につけるはずはなく、今日は、一見して裏社会の人間だとわかる男から、「完全閉鎖されている半島へ潜入し、2000万ドルが積まれたトラックを奪え」という仕事の注文を受けることに。チームは、ジョンソクとチョルミンの他2名。分け前は半分だ。

感染者は暗いところでは目が見えないから、夜のうちに半島へ潜入し、トラックを運転して帰るだけ。そう考えれば、この仕事はある意味で容易かも……。?また、2分の1が分け前という条件も悪くないが、弁護士との立ち合いで契約書を作るわけではないから、この契約はどこまで有効?港の近くで3日間待つとのことだが、ひょっとしてカネの入ったトラックを引き渡したら、その場で射殺されてしまうのでは……。?そんな不安もいっぱいだが、面白い映画作りのためには、とりあえずそれは無視……。

また、港までは船で潜入する手はずが整っているとしても、札束の入ったトラックはどこにあるの?そこに行くまでの車は?ガソリンは?その間の食料や水は?任務達成に向け

て検討すべき課題は多いが、面白い映画作りのためには、とりあえずそれも無視。4年前にはタクシーの運転手をしていたというおばさんがチームに入っていたから、市街地がいかに崩壊していても、トラックの所在地までの運転はすいすいと順調。こんなにコトが順調に運ぶのなら、2000万ドル×2分の1の分け前がもらえるこの仕事はチョロいもの。用心に用心を重ねてやっとトラックまで到着しジョンソクも、一安心して帰路につこうとしたが・・・。

■□■半島内には生存者が！それは、631部隊！■□■

ヨン・サンホ監督が共同脚本を書いた本作はたしかに「ゾンビ映画」だし、大ヒットした『新感染 ファイナル・エクスプレス』の続編だが、スクリーン上に大量に登場するゾンビたちには何のキャラクターも与えられず、ただ人間を襲うバケモノとして存在するだけ。それは、本作を単なる「ゾンビ映画」ではなく、「人間ドラマ」にするためだ。そのため本作には、完全に閉鎖された半島の中で4年間ずっと生き抜いてきた軍団「631部隊」が登場するので、それに注目！その指揮官はソ大尉（ク・ギョファン）だが、今やその実権は、現場を仕切るファン軍曹（キム・ミンジェ）が握っているらしい。

たいした苦労もなく2000万ドルが入ったトラックを見つけたジョンソクたちにトラブルが発生したのは、運転手をどかさそうとした時。息絶えていたはずのその男から突然襲われたことによって、クラクションが鳴り響き、それを聞きつけたゾンビたちが大量に襲撃してきたから大変だ。トラックともう1台の車を駆って大量の感染者（ゾンビ）から逃げ出した4人だったが、その進路の前に631部隊の照明弾が放たれたから、一難去ってまた一難。こんな事態は全く想定していなかったのに・・・。クラッシュした車から投げ出されたジョンソクたちは、真昼の如く照らされた空の下、群がる感染者たちと必死に戦ったが、もはやここまで・・・？

■□■ここにも生存者が！それは、あの家族！■□■

「ゾンビ映画」には、必ずしも美女を登場させる必要はない。しかし、『カメ止め』でもアイドル女優・松本逢花の他、人妻女優の代役として監督の妻・日暮晴美を登場させていたように、ストーリーを面白くさせる上で女優陣の活躍は不可欠だ。しかし、チョルミンの妻で、ジョンソクの姉だった美女は、本作冒頭でゾンビの餌食にされてしまったから、本作はどこでどんな美女を登場させるの？そう思っていると、本作には10代の長女・ジュニ（イ・レ）とまだ幼い次女のユジン（イ・イエウォン）の母親・ミンジョン（イ・ジョンヒョン）が登場し、大きな役割を果たすので、それに注目。ちなみに、この美女の登場に関するヨン・サンホ監督の演出は巧みで、ジョンソクたちが車に乗って半島を脱出するべく船に向かった4年前のシークエンスにもこの美女とその家族を登場させているので、なるほど、なるほど・・・。

ミンジョンはかつて軍の士揮官だった初老のキム（クォン・ヘヒョ）と共に631部隊から抜け出し、隠れ家に隠れて無線でSOSを出し続けているらしい。ここでも、あの時船

にたどり着くことができなかったミンジョンたち家族が、なぜ今日まで生き抜いているのかのストーリーが省略されているが、それもいったんは横に置きたい。そして、本作中盤では、車から放り出された状態で大量のゾンビたちと戦い、もはやこれまでか、とあきらめかけていたジョンソクを車に招き入れ、見事なハンドルさばきで感染者たちを蹴散らしていくジュニのハンドルさばきに注目したい。

観客動員1600万人を突破し、韓国歴代 NO. 1 となった『エクストリーム・ジョブ』（19年）を観れば典型的にわかる通り、韓国映画は出演者のキャラが濃いのが特徴。しかして、本作では美女・ミンジョンの戦闘能力や、長女・ジュニのレーサーまがいの運転技術もさることながら、その母娘愛、家族愛が非常に濃いので、しっかりそれを味わいたい。

■ゾンビも怖い、人間の狂気はもっと怖い！？■

朝鮮半島がいかにも“感染列島”化していったのかについては、私は観ていないが、「新型インフルエンザ」らしき感染症によって日本列島が“感染列島”化していく姿は、瀬々敬久監督の『感染列島』（08年）『シネマ22』未掲載）を観た私はよく知っている。

2021年の正月明けは、新型コロナウイルス騒動が広がる中で再度の緊急事態宣言の“発出”が確実になっているが、『感染列島』の物語は、今からちょうど10年前、2011年の正月明けからスタートしていた。その年の夏の日本列島は、数千万人を超える感染者と1000万人を超える死者が発生していたそうだが、凶悪化するゾンビによって“感染列島”化した朝鮮半島は完全に封鎖されてしまったのだから、それから4年後の今、生存者は誰一人いないはず。私はそう思っていたが、本作には前述したように、631部隊や、ミンジョンたち家族が登場してきたのでビックリ！しかも、ミンジョンたち家族は細々と生き延びているだけだが、事実上、ソ大尉に代わってファン軍曹が指揮を執っている631部隊は、かなり凶暴化した集団としてハチャメチャな集団生活を送っていることにビックリ！

人間の運、不運は神様にしかわからないが、その意味では、長女・ジュニの運転する車に救われたジョンソクは運が良かったが、2000万ドルを積んだトラックごと631部隊に捕まった Cholmin は不運。『グラディエーター』（00年）で描かれたように、ローマ帝国時代には奴隷の一部が「グラディエーター（剣闘士）」として命を懸けて戦い、それをローマ市民たちが楽しみながら見物するという恐ろしい制度があったが、今、ファン軍曹が主催しているゾンビたちを使った“あるゲーム”は、人間の狂気がゾンビ以上であることを示すおぞましいものだ。さあ、ワケの分からないそんな“ゲーム”に出場させられた Cholmin の運命は・・・？

■金の行方は？うごめく人間模様がクライマックスに！■

前述したように、本作はゾンビ映画だが、何度も登場してくる大量のゾンビは単なる物体だけの存在で、ストーリー形成上大きな意味をもたず、後半からのストーリーは200

0万ドルの争奪戦の中にうごめく人間模様になってくる。そこでのキーマンは、631部隊の中で1人だけファン軍曹に従わず、ソ大尉に忠誠を尽くすキム二等兵だ。トラックの中の札束と衛星電話を見つけた、と彼からの報告を聞いたソ大尉が、恐る恐る電話をかけてみると、その電話は「港で3日間待っている」と約束した、あの裏社会の連中に通じたから、シメシメ。しかも、トラックに乗ってカネさえ持ってくれば感染列島から脱出させてくれる上、半額をくれると約束してくれたから、その手に乗らないバカはいない。あとは、ゲームに熱中しているファン軍曹に気づかれないように、うまく631部隊の駐屯地から脱出し、一路、港までトラックを走らせるだけだ。

他方、ミンジョンたちに救出されたジョンソクは、同じころ、チョルミンを救出するべく631部隊の駐屯地に潜入。競技場内で、ゾンビと戦っているチョルミンを救出するためには、631部隊の兵士を倒すよりもゾンビを競技場から解放してしまった方が得策。そんなジョンソクの思惑が見事にハマったうえ、ジョンソクとチョルミンを乗せて脱出した長女のジュニやミンジョンの運転もプロ級だ。しかし、混乱を立て直して大量の車で追いかけるファン軍曹率いる部隊も強力だから、ここから展開される三者入り乱れてのカーチェイスは本作最大の見どころになる。

しかして、カーチェイスの勝者は誰？そして、カネを積んだトラックで無事に港に到着するのは一体誰？それは当然ジョンソク、チョルミン、ミンジョンたちのはずだが、その脚本と演出は如何に？

■ラストに向けて、韓国映画の“濃さ”を堪能！■

韓国映画ではじめてアカデミー作品賞を受賞したボン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）でも、韓国歴代ナンバー1の観客動員となった『エクストリーム・ジョブ』（19年）（『シネマ46』239頁）でも、大ヒットする韓国映画では登場人物のキャラの濃さが目立っている。それと同じように本作でも、クライマックスとなる三者入り乱れたカーチェイスの中、ファン軍曹の狂気を秘めたずる賢さ（？）はもとより、美女・ミンジョンの戦闘能力と運転テクニック、そして、ジョンソクとチョルミンの「絶対に生きて帰るんだ」との執念が次々と強力に描かれるので、それに注目！

ド派手に照明弾を打ち上げ、銃をぶっ放しながらジョンソクたちを追うファン軍曹率いる631部隊が必死なら、トラックで駐屯地から逃げ出したソ大尉も、衛星電話での通信で明確な目標を持っていたから、今や必死。そんな中、ファン軍曹の部隊を何とか振り切ったミンジョンたち家族とジョンソク、チョルミンは今やっと港にたどり着こうとしていたが、そこで放たれた一発の弾は、ミンジョンの足に命中したから、さあ大変。撃ってきたのは一体誰？さらに、港の近くでは、大きな音を聞きつけた大量のゾンビたちが襲撃してきたから、足を負傷したミンジョンの脚力がゾンビに負ければその餌食になってしまうのは必至。折りしも、上空にはあるハプニング（？）によって救助用のヘリコプターが飛

来したが、さて、最後に救出されるのは一体誰？もちろんその詳細をここで書くワケには
いかないから、本作ラストに見る韓国映画特有の“濃さ”と面白さは、あなた自身の目で
しっかりと！

2021（令和3）年1月6日記